

「そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。放っておくがよい。あの計画や行動が人から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものなら、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」一同はこの意見に従い、使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話してはならないと命じたうえ、釈放した。それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、毎日、神殿の境内や家々で絶えずメシア・イエスについて教え、福音を告げ知らせていた。（使徒5：38～42）

使徒たちは最高法院で、「人に従うより、神に従うべきです。私たちの先祖の神は、あなたがたが木に掛けて殺したイエスを復活させられました。神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。私たちはこのことの証人であり、また、神がご自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことの証人です」と、堂々と証言した。この証言を聞いた最高法院の議員たちは激しく怒り、使徒たちを殺そうと考えた。その時、民衆から尊敬されているファリサイ派の律法の教師であるガマリエルと言う人が、使徒たちを議場から出すように命じ、議員たちに言った。「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いは慎重にしてください。以前にもテウダが、自分を何か偉い者のように言って立ち上がり、その数四百人くらいの男が彼に加わったことがあった。彼は殺され、従っていた者は皆散らされて、跡形もなくなった。その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こしたが、彼も滅び、従っていた者も皆、ちりぢりにさせられた。」ガマリエルはパウロが師事した穏健で公正な律法の教師であった。彼は、テウダとユダが起こした過去の反乱の例をあげ、二人とも鎮圧され、その運動は跡形もなくなったと話した。そして、「そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。放っておくがよい。あの計画や行動が人から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものなら、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ」と続けた。彼らの宣教活動は放っておきなさい。彼らの計画や行動が人から出たものなら、テウダやユダの反乱のように自滅する。神から出たものなら、滅ぼすことはできないし、もしかしたら、諸君は神に逆らうことになるかも知れない。ガマリエルの発言は、最高法院の議員たちの興奮を収める穏当な意見であった。議会はガマリエルの意見に従わざるを得なかった。使徒たちを呼び入れて、鞭で打ち、イエスの名によって語ってはならないと命じ、釈放した。罪なしと放免した訳であるが、鞭打ちをしている。当時の権力者たちの横柄な振る舞いを見せられる。ところが、使徒たちは主イエスの名のために辱めを受けたことを喜んだ。パウロは、「私はキリストとその復活の力を知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです（フィリピ3：10～11）」、また、「キリストと共に苦しむなら、共に栄光をも受けるからです（ローマ8：17c）」と、キリストの苦しみに与り、その死にあやかるなら、復活の命、栄光を受けると言っている。使徒たちはキリストの名のために苦しめられたことを、栄光を受けたと喜んだのである。使徒たちは、毎日、神殿の境内や家々で絶えず、ナザレのイエスはメシア・キリストであると教え、福音を告げ知らせていた。